2022年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター　ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて、学生たちが自律的に学習できる環境を整えることから始まった。現在は、英語とスペイン語においてILSSP（Independent Language Study Support Program）を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら（英語）、あるいはオンライン学習ツールを用いて（スペイン語）、自律学習ができるような支援を行っている。

これらの活動に加え、言語（ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、フランス語）ごとに曜日・時限を決めて、母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学生の外国語学習のサポートを行ったりしている。

今年（2022）度も昨年（2021）度に引き続き、新型コロナウイルスの流行により、ランゲージラウンジもオンラインを活用しながら実施したが、秋学期からは大学の授業が全面的に対面式となったこともあり、可能な範囲で対面の要素を取り入れることができた。オンラインでの実施は大変な面もあったが、活動に携わる教員にとっても語学教育のあり方を見直す良い機会となったように思われる。

次年度についても、対面かオンラインかを問わず、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1　英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program（ILSSP）、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、春学期はすべてのプログラムをオンライン（Zoom）にて行った。秋学期は、対面授業が基本となったが、ここ数年で白金キャンパスに通う3、4年生の参加者が増えてきていたことから、対面とオンラインの両方で実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日（11：00–15：30）と水曜日（11：00–15：30）に実施した。担当者は各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ（学習記録）を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。春・秋学期共に受け入れ可能な人数を超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の学科ごとの参加者数は表1の通りである。

表1　ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	0	5	0	0	3	1	0	2	0	1	2	0	1	1	18
秋	0	0	1	0	0	1	3	1	0	0	2	2	7	1	2	1	21

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休み（12：40〜13：20）に実施した。担当者は、各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英語でアウトプットする機会を求める学生に向けて、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。各月の参加者は、春学期は5〜12名（6〜13セッション実施）であった。秋学期は、対面でもオンラインでも参加ができるよう実施形態を変更したものの参加者が減少し、各月（9月を除く）の参加者は2〜4名であった（2〜6セッション実施）。オンラインでの実施によりキャンパスを問わず参加が可能となったため、今年度も3、4年生の参加者が一定数あった。来年度もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえるよう努力を続けたい。

2.2　ドイツ語部門：コンスタンティネスク　チェザル

2022年度ランゲージラウンジ（ドイツ語）は『ドイツ語deランチ』と題し、森本康裕氏（本学非常勤講師）が担当した。今年度は春学期途中から対面授業が再開されたため、対面授業再開まではオンラインで、以降はすべて対面とオンラインの併用形式での講座実施となった。開催日時は原則的には春・秋両学期を通じて毎週金曜の昼休みの60分間（12：30〜13：30）だったが、参加者のリクエストに希望に応じて延長されることもしばしばであった。参加者は平均して1回あたり3名程度で、主にドイツ語初級を履修し終えた2年生の学生だったが、ドイツ留学を控える3年生以上の学生、あるいはドイツ留学中の学生や聴講学生が参加することもあった。

今年度の講座内容は、数年来のコロナによる感染対策のため長らく対面でのコミュニケーションの欠如という状況を踏まえ、「教員と学生間および学生間の対面コミュニケーション」を目的とし、毎回の講座に特定のテーマを設定せず毎回の参加者との雑談の中から方向性を決定していくこととした。なお、参加者のリクエストによって使用した資料としては、Tagesschau、Nicos Weg、Spiegel TV（すべて無料動画としてインターネット上で提供されている番組）などが挙げられる。また、これを基にしてドイツ語の正確なリスニングの確認や基礎文法項目の復習、重要なフレーズや単語の確認、すでに大学授業内で既習の文法事項などを復習しながら、現代のドイツの時事的な問題について参加者間で意見交換を行った。

さらに秋学期からドイツ語のランゲージラウンジでは留学生のNoelle Müller氏（ノエル・ミュラー）

を担当に、『Deutsch am Dienstag』（火曜日のドイツ語）と題した新しいプログラムの実施を試みた。Müller氏はドイツのトリーア大学英文学科の3年生であり、2022年度の秋学期から本学で交換留学生として勉強をしている。『Deutsch am Dienstag』は毎週火曜日の昼休みに全10回開催し、完全対面形式の実施となった。参加者は1回あたり平均して2名程度で、主に1年生の学生であった。参加した学生は積極的にMüller氏とドイツ語で会話し、楽しく和やかな交流の場になったようである。

2.3　スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間を設定し、春学期オンライン、秋学期対面で行った。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVEglobalは、今年度も利用している。

オンラインコース：今まではそれぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが目立っていたが、留学の実現の可能性が見えてこない現状では、応募者の減少が目立った。学習期間は長くなった一方で、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点があり、さらに工夫が必要である。

会話スペース：春学期のオンラインは参加者ゼロのセッションが多かったが、秋学期は毎回何人かの、そして目的を持って参加した学生が見られたが、そのような学生が減少している。今後、時機にあったスペイン語圏のテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモティベーションアップにつなげる工夫を続けたり、より学生が参加しやすい方法を考察したりして、さらに活発なスペースになるように努力を続けたい。

2.4　中国語部門：日高知恵実

2022年度ランゲージラウンジ（中国語部門）「中文会話倶楽部」は、4名の中国人留学生スタッフが中心となり、さらに教員である日高がサポート役に入る形で運営をおこなった。開催日は毎週月曜日のお昼休みとし、春学期は4月25日から7月18日まで全13回、秋学期は10月3日から1月16日まで全11回実施した。開催形態は、春学期はWeb会議ツール（Zoom）による完全オンラインであったが、秋学期は通常授業が原則対面となったため、参加を希望する学生の需要にこたえるべく、Zoomと対面（横浜校舎10号館1032教室）のハイブリッド形式とした。

毎回の活動では、中国の言語文化に関する様々なテーマを設定した。テーマは音楽、ドラマ・映画、飲食、ファッション、学校生活、交通事情など多岐にわたった。担当の留学生スタッフが自作のスライドやYoutubeの映像を使ってそれらを紹介し、日本人学生は発表を聞いて言語文化に対する理

解を深めたり、関連する中国語の単語やフレーズの発音練習をおこなった。4名の留学生スタッフはみな優秀かつ熱心で、しかも若い世代であることから、最新の中国文化事情についてたくさんの情報を提供してくれた。日本人学生の参加人数は年間を通じて2名から10名と決して多くはなかったが、それゆえに定期的に参加していた学生たちはランゲージラウンジの外でも繋がるほど、学部・学年、国籍を越えて交友を深められたようである。中級レベルの一部の学生に対しては、メインの活動とは別に、Zoomのブレイクアウトルーム機能を利用して、留学生スタッフと自由に会話を楽しめる場をセッティングした。

来年度は今年度の開催形態や内容などを見直して、より充実した活動を進めていきたい。またランゲージラウンジの周知にも力を注ぎ、より多くの学生に参加してもらえるよう尽力したい。

2.5　韓国語部門：李善姫

2022年度韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」は、高槿旭先生により5月の3週目まではオンライン同時双方向型（Zoom）の形態で、5月の4週目からは対面とオンラインライブ併用のハイブリッド形式で実施された。

講座の実施状況は次のとおりである。

1）春学期：韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」

毎週水曜日（12時35分～13時30分）実施され、参加人数は、春学期は3～24人であった。

2）秋学期：・韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン（初級）」
・韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン（中上級）」

秋学期には、初級と中上級の二つのクラスに分けて実施した。「韓国語ビタミン（初級）」は、毎週水曜日の12時35分～13時、「韓国語ビタミン（中上級）」は毎週水曜日の13時～13時30分に実施された。参加人数は、韓国語ビタミン（初級）」は3～7人、「韓国語ビタミン（中上級）」は2～3人であった。

●学習内容

学校生活、食事、買い物、映画、音楽など身近なテーマを中心に、より自然な韓国語表現を身につけるようにした。また日本と韓国の文化の違いについても話し合った。

テーマは、manabaで事前に知らせ、学生が前もって準備し、参加するようにした。

●学生の反応と成果

manabaで会話のテーマを事前に掲示することで、予習してくる学習者も多く、効率的に学習で

きたと思われる。学生の意見としては、「話しやすい環境で、プレッシャーを感じずに、韓国語で話すことができてよかった」、「韓国語が好きな仲間に出会えてうれしい」という意見があった。先生からは「ハイブリッドで実施することで、戸塚校舎に登校できない学生も参加することができて非常によかった」ということが伝えられた。

全体的にランゲージラウンジを実施することにより、韓国語で話す喜びや達成感を感じ、韓国語学習のモチベーションをあげることができたと思われる。

また、多くの学習者が参加できるように、ハイブリッド形式での実施を続けることが必要であると思われる。

2.6　フランス語部門：塩谷祐人

2022年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が担当した。対面での開催が可能になったものの、学生の参加のしやすさなどを考慮し、本年度も昨年度の開催方法を踏襲し、毎週月曜日にコンテンツをmanaba上で配信し、必要に応じてzoomを使用した交流会を開催した。

登録者数は67名と昨年度（約80名）に比べるとやや減ってはいるものの、一定以上の需要があることが窺える。なお、参加者はフランス文学科や国際学科の比率が高いが、さまざまな学科に所属する学生が参加しており、「学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設ける」という本ラウンジの目的に適うものとなった。

コンテンツの内容は、学生からの要望もあり、昨年度よりもフランス語の勉強方法や発音に関するものを強化したが、同時にフランスの日常生活にまつわる文化的な出来事（交通事情やクリスマスの様子など）も併せて紹介した。また、自主学習できるように、おすすめの勉強サイトや検定試験の情報、そして、小テストも作成し、力試しや授業の復習ができるようにした。この小テストは任意で取り組むものなので多くの学生が参加しているとは言い難いが、一方で毎回のように利用している学生もおり、本ラウンジを語学学習にも積極的に役立てようという学生の意欲が見られた。

今後も学生の要望に応えつつ、 文化と語学の両面からフランスに対する興味関心が高まるラウンジづくりを目指したい。なお、対面では特定の曜日の昼休みしか活用できなかった本ラウンジであるが、昨年度、本年度の活動を通じて、オンラインでの開催であれば通学時間や空き時間を利用して参加することが可能であり、キャンパスにとらわれることもなく参加できるという利点が浮き彫りとなった。しかし、ライブでの交流や対面で言葉を交わしながらフランスについて学生同士が話をできる場も必要であると思われる。そのため今後の課題としては、コンテンツと交流の場作りというラウンジの二つの特性が活かせる新たな運営方法も検討していきたい。